

# 今年の観察のなかから

\*  
足立義弘

今年1年間、さしてたる成果もなく、とりわけキマダラルリツバメについてはなんら進展をみることができなかった。そこでこの一年間の但馬に於けるフィールドワークのなかでの観察、経験等でめぼしいと思われるものについて簡単に報告しておきたい。もちろん Iratsume のページかせぎも兼ねてのことである。

また、今年からはトンボ類についても調査対象の一つに加えてゆくつもりである。会員諸氏の中で興味のある方には特によろしくお願ひしたい。

## ○ウスイロヒョウモンモドキの交尾

7月5日金山峠村岡側のススキの葉上でウスイロヒョウモンモドキ (*Melitaea diamina FRUHSTORFER*) の交尾を観察した。

周りにはカシワの疎林のある開けたススキの草原上であった。追飛の後、雌雄が、ススキの葉上に同方向に並び、雄が腹部を“し”の字形に曲げ雌の尾端に接合しようとする。数回失敗した後、接合がうまくゆくとほぼ同時に雌雄は反対方向を向く。ここでやっと一般に見られる“ショウの交尾”的な立ちになる。少しの間ススキの葉上を歩き回っていたが、やがて静止した。雄は時々翅を小刻みに震わす。時々歩いて他へ移動するが、どうもこちらに気が付いているようだ。このとき主導権を握っていたのは雌のようである。雄はそのまま引きずられたり、ぶらさがったりしていた。

離れるときは雌が後肢で雄の交尾器の端を押レのけるようにして離反した。まもなく雄は飛び立って行ったが、雌は暫くの間そのまま静止していた。

交尾に要した時間は、14時10分くらいから16時40分と、約2時間30分にも及んだ。曇り時々雨という天候条件と、我々の観察時の刺激も影響しているようと思われる。

## ○葛畠のクロシジミ

7月16日關宮町葛畠の草地で多數のクロシジミ (*Niphanda fusca BREMER*) を目撲した。時々小雨の降る天候であったが、シダの一穂を主とした草地のなかを歩いていると、クロシジミが次々に飛び出しだ。不活発で、すぐに他の草

\* 現住所 〒616 京都市

## 足立義弘

の葉上に止まってしまう。付近のあちこちの葉上にも翅を開じて静止している個体が見うけられ、写真撮影のためレンズを10cmくらいに近付けても逃げる気配を見せない。ただし時々雲の切れ間から陽のさしニむ合間には、オカトラノオと思われる花に吸蜜に訪れる姿が見られた。

翅の状態について、雄は少なからず破損した個体が見付けられたが、雌については殆ど新鮮な個体であった。さらに雌の大きさと、翅裏面の斑紋に個体差が認められた。

また同地に於いて、30mくらいの草地を隔てた草地では殆どといつてよいほど本種は認められなかつた。かわりにそこには、多くのヒョウモン類と、数は少ないがツマグロキチョウ、アカタテハ、セセリチョウ数種ホガザミなどの花に吸蜜に訪れていた。このとき両草地間の植生の違いについて確認していない。

11時くらいから30分ほどの間に20数頭をネットトレイレにて、たゞし写真撮影を行ないながらであり、参考までに記すとこのとき14枚のクロシジミを写している。このうち6♂、3♀を標本とし、他の個体はその場で放した。同行の木下氏も10数頭は採集していた。

クロシジミについて、非常に局地的ではあるがこのように繁殖するものどうか、手持ちの貧弱な資料では納得りにくく説明が得られず、みなさんの経験等をお聞かせ願いたい。

### ・神鍋のウスバシロチョウ

5月22、23、24日と日高町神鍋の東河内、太田神鍋のみだれおの森（以下太田神鍋と呼ぶ）、名色の薬武登山口（以下名色と呼ぶ）、橋本付近の串道上および別荘地周辺（以下橋本と呼ぶ）に於いて、それぞれウスバシロチョウ（*Parnassius glorialis* BUTLER）を確認した。以下にその状況を述べておく。

東河内に於いては、グミとダイコンの花に吸蜜しており、周辺の畠地や開放地などにも相当数の飛翔個体が見られた。なかでもグミには、高さ1.5m足らずの株に10数頭が入れかわり立ちかわり群れていた。また付近の荒れ畠地の湿った枯草の下から羽化後間もないと思われる個体がはり出してくる様子も見られた。

太田神鍋に於いても、やはりグミの小さな株に東河内と同様、多数が群がっており、交尾中のペアも見受けられた。このあたりは、スキー場に連なる開放地のようなところであり、ここではグミ以外の花での吸蜜は確認していないが

今年の観察のなかから

やはり周りには多くの飛翔個体が見られ、あたりには広範囲にわたる蜜源があるのではないかと思われる。

名色では、前記二地点に比べ個体数はやや少なく感じた。ここではムラサキサギゴケと思われる花に吸蜜しており、むしろ翅を開いて“日光浴”をしそうな個体の方が多かった。

朽木では、東道上で数頭の飛翔個体を見かけたのと、さらに別荘地付近の草地で同じく数頭の飛翔個体を目撃した。

これらウスバシロチョウを確認した地点で共通していることは、山裾の開拓地および周囲に林があるなど林縁的環境であり、地面には湿った枯草が堆積していることである。さらに朽木を除いて花期の終ったムラサキケマンも確認している。そしてもう一つは、これらの稚生地は人の生活圏に非常に接近しているがまでは、重なっていると思われることである。このことに付けての話の展開は今後の調査に待たねばならないだろう。

これらの地点は、神鍋全体からみるとならばほんの一端にしか過ぎず、同様の条件を備えたところは他にも当然あると考えられる。今後の進展が楽しみだ。

尚、神鍋でのウスバシロチョウの記録はまだ発表していない(Iratsume誌上に於いて)のでここに挙げておく。産地は一括して神鍋とした。

1980-7-22 5羽 1♀ Col. Y-Adachi

1980-7-23 1♂ Col. Y-Adachi

1980-7-24 1♀ Col. Y-Adachi